

なげきつつひとり寝る夜①

【蜻蛉日記】

藤原道綱母

九月頃

九月ばかりになりて、出でにたるほど

(手探りで)何の気なしに

に、箱のあるを手まさぐりに開けて

見れば、人のもとにやらむとし

手紙

驚きあきれて

ける文あり。あさましさに、見てけり

だけでも(兼家に)知られよう

とだに知られむと思ひて、

書きつく。

うたがはしほかに渡せるふみ見ればここ

やとだえにならむとすらむ

案の定

十月の末頃

など思ふほどに、むべなう、十月つごもりがたに、三夜

なにくわぬ顔をして

しきりて見えぬ時あり。つれなうて、「しばし

思わせぶりなことを言う

こころみるほどに。」など、気色あり。

夕暮れ方

宮中の方からは塞がつているのだ

これより、タさりつかた、「内の方ふたがりけり。」

とて出づるに、心得で、人をつけて

町尻小路

見すれば、「町の小路なるそこそこになむ、とまり

給ひぬる。」とて来たり。さればよと、

不愉快

いみじう心憂しと思へども、いはむやう

言うすべもわからないで

も知らであるほどに、二、三日ばかりあり

そのようだ(兼家が来たようだ)

て、暁がたに門をたたく時あり。さな

めりと思ふに、憂くて、開けさせ

行つてしまった

ねば、例の家とおぼしきところにも

このまま済ましてはおくまい

たり。つとめて、なほもあらじと思ひて、

なげきつつひとり寝る夜のある間は

いかに久しきものとかは知る

改まつて

と、例よりはひきつくろひて書きて、移ろひ

色のあせた

たる菊にさしたり。返り事、「あくるまでも

急な役人

こころみむとしつれど、とみなる召使の

来あひたりつればなむ。全くもつとまなごた
いと理なり

つるは。

げにやげに冬の夜ならぬ真木の戸

もおそくあくるはわびしかりけり」

さても、いとあやしかりつるほどに事なしび平気な様子をしているたり。しばし

こっそり隠している様子
は忍びたるさまに、「内に。」など言ひ

つつぞあるべきを、いっそう 不愉快に
いとどしう心づきなく

思ふことぞ限りなきや。